

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：12606

研究種目：科学研究費補助金（基盤研究（C））

研究期間：2009～2012

課題番号：21520095

研究課題名（和文）17世紀・釜山窯の成立過程とその展開

研究課題名（英文）Creation and development of the seventeenth-century Busan kiln

研究代表者

片山 まび (KATAYAMA MABI)

東京芸術大学美術学部芸術学科・准教授

研究者番号：80393312

研究成果の概要（和文）：

17～18世紀初頭の釜山窯の様式と窯業技術について、伝世品のみならず韓国の窯跡出土品を対象に調査を行った。その結果、釜山窯にいたる高麗茶碗の様式変遷は、日本側の受容の変化のみならず、朝鮮陶磁の変遷を反映させつつ展開していることが明らかとなった。窯業技術においては、釜山窯の成立当初は慶尚南道の各窯からの技術導入を行い、最末期には朝鮮の窯業技術と日本の窯業技術との混合が図られたことを初めて解明した。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I conducted a survey regarding the style and the ceramic techniques of the Busan kiln, used by the Tsushima clan from the seventeenth century to the early eighteenth century. I examined ceramics passed down through generations, as well as artifacts from kiln sites in South Korea. The survey results indicated an increase in the Japanese reception to the stylistic changes of the *Korai-chawan* leading to the Busan kiln, as well as reflections of changes in Korean ceramics. This study reveals that the Busan kiln was created using technology introduced from each of the Gyeongsangnam-do's kilns; this study also shows the attempts made to mix Korean and Japanese ceramic techniques in the closing years of the seventeenth century.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美術史

キーワード：陶磁器

1. 研究開始当初の背景

本研究では、17世紀から18世紀初にかけて釜山窯（ふざんよう）で日本からの注文によって製作された茶碗を取り上げることとした。研究開始当初の背景となった課題としては、以下の3点が挙げられた。

(1)従来の研究では史料と伝世品が主となっているが、出土資料等を加えることにより、様式や技法の変化を詳細に論じることができないのではないか。

(2)(1)のような課題は、従来の日本側の研究成果のほか、窯跡調査などの韓国における研究を盛り込むことで解決することができるのではないか。

(3)韓国でも高麗茶碗に関する研究が高まりつつあるが、位置づけは未だ難しい。研究を進める過程で情報交換を行い、日本と韓国の双方向からの高麗茶碗研究を可能とすることができるのではないか。

2. 研究の目的

本研究の最も核となる目的は、従来、日本側の研究成果を主に語られてきた高麗茶碗研究に対して、韓国側の研究成果を取り入れ、日韓双方向の視点による高麗茶碗研究の基礎を築きあげることにある。

数ある高麗茶碗のなかでも、その最終形ともいえる釜山窯をとりあげることは、双方の様式・型式・窯業技術等の摂取と消化の過程を解き明かすうえで最も適切である。

具体的には、出土資料等のより客観的な年代根拠の提示をまず提示し、それらに対する様式・型式・窯業技術等について、日韓双方の陶磁史における研究成果にもとづいて研究を行う。

最終的には、釜山窯の茶碗が日本陶磁史のみならず、韓国陶磁史のなかでどのように位置づけられるのかについて、その可能性を考察する。

3. 研究の方法

(1) 編年基準資料の追加

伝世品の調査に加えて、日本の消費地遺跡出土資料、高麗茶碗の祖形、もしくは類型となった朝鮮前期（15～16世紀）、中期（17～18世紀前半）の資料を追加する。

(2) 日本と韓国における調査

(1)を行うため、日本で所蔵されている伝世品の調査、日本各地の遺跡から出土した高麗茶碗の調査、さらには韓国における朝鮮前期、中期の伝世品、窯跡出土資料の調査を行う。

(3) 胎土、目跡の高精細画像

伝世品、出土資料とも高精細画像により断面や目跡を撮影し、データを蓄積する。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究によって得られた主な成果は以下の5点である。

① 釜山窯成立以前—彫三島—

09～10年度の研究では、主には釜山窯成立以前の様相を明らかにするため、まず「彫三島」について研究調査を行った。彫三島とは、まず陶器の地に斜線を重ねて彫り、そこに白土を象嵌した茶碗である。

この彫三島については、朝鮮前期の粉青沙器から彫三島、さらに釜山窯の三島手への展開の把握をテーマとした。調査方法と内容は、伝世品のほか、日本の消費地遺跡から出土した例について熟覧を行ったほか、実測図を作成した。（実測図については研究協力者の永井正浩氏のご協力を得た）。そのほか新たな分析方法として胎土や目跡の高精細画像を撮影した。またこれらの生産地をつきとめるため、京畿道陶磁博物館等に所蔵されている窯跡や韓国国内の消費地遺跡出土資料について、同様の調査を行った。

その結果、胎土や目跡から彫三島と関連づけられる窯の推測、製作年代、製作技術などが明らかとなった。しかし当初、予測をしていたように彫三島は粉青沙器が消滅するなかで誕生したが、その文様や器形、製作技術は釜山窯の三島手に直結するものではなかった。文様や器形が新たに生み出されていることはもちろん、窯業技術の側面からしても粉青系の技術で製作された彫三島と、朝鮮中期の白磁系の技術で製作された釜山窯の三島手は異なることが明らかになった。すなわち釜山窯の窯業技術の系譜は、朝鮮中期の白磁の系譜に連なるとの予測が得られた。

本研究成果については、特に美術史的、また窯業技術に関連する部分については、2013年10月の梨花女子大学校における学会で発表予定である。

② 釜山窯成立以前の様相—呉器—

彫三島と同じく09～10年度の研究では、「呉器」を研究対象とした。本研究でも彫三島と同じく、朝鮮前期の軟質白磁から呉器、そして「御本呉器」までの展開を考察した。

調査方法と内容は、伝世品のほか、日本の消費地遺跡から出土した例について熟覧を行い、実測図を作成した。（実測図については研究協力者の永井正浩氏のご協力を得た）。そのほか新たな分析方法として胎土や目跡の高精細画像を撮影した。またこれらの生産地をつきとめるため、釜山大学校博物館など韓国の諸機関に所蔵されている窯跡や韓国国内の消費地遺跡出土資料について、同様の調査を行った。

その結果、呉器茶碗が日本の趣向に合わせて、高麗茶碗についてある種の定型化を行っ

た茶碗であるとの結論にいたった。具体的には、木碗形、高い高台、割高台の継承・拡大・定型化であり、これは次の釜山窯における茶碗の継承されていく。特に慶尚南道梁山で製作された呉器の目跡と最初期の釜山窯の茶碗の目跡が同じものであることから、釜山窯の窯業技術のルーツのひとつを明らかにするに至った。

本研究成果については、『美術史研究』2010年に論文発表を行った。

③ 釜山窯の成立—古館の様相—

①②にもとづいて、不明な部分が多い古館の内外に築かれた最初期の釜山窯の様相について11～12年度に調査を行った。

調査方法としては、実地の踏査、伝世品、慶尚南道地域の資料、対馬金石城跡出土資料の熟覧、実測図（実測図については研究協力者の永井正浩氏のご協力を得た）、高精細画像の撮影を行ったほか、12年度に戦前の文献や記録の収集、整理作業を行った。

その結果、古館の窯跡の踏査では、ほとんどが宅地造成地に変わり果てていたが、戦後の研究では窯跡の場所について取り上げられておらず、一定の成果はあった。そのほか資料や戦前の記録などを総合してみると、梁山のほか金海の製品や技術が古館の製品に影響を及ぼしていることが予測可能となった。

本研究成果については、さらに調査を重ね、検討を加える必要があり、今後、論文等で発表を行っていきたい。

④ 釜山窯の展開—新館の様相—

当初は予測していなかったが、戦前に収集された新館の釜山窯出土の破片資料を実見することが可能となり、10～12年度は本資料について調査を行った。

調査方法としては、破片資料について熟覧、実測図（実測図については研究協力者の永井正浩氏のご協力を得た）、資料すべてについて撮影を行った。また戦前の新聞記事等も収集し、陶片の採集経緯についても探った。

その結果、本陶片が戦前に釜山考古会によって調査が行われたものであり、今日、窯が完全に破壊されている新館での窯業生産をするうえで、きわめて重要な資料であることが明らかとなった。戦前に採取された本資料は多くが散逸しているものの、幸いなことに窯業技術を示す窯道具は多くが残されており、これについて研究協力者の永井氏とともに日本の窯道具、朝鮮時代の窯道具との比較考察を行った。結論としては釜山窯で用いられた窯道具は、日朝双方の技術を合わせ、さらに改良を重ねたものであり、倭館というマージナルな場において両国の技術者が陶磁器を焼くという釜山窯の性格を如実に示すものであった。

本研究成果については、愛知県美術館『木

村定三コレクション 朝鮮陶磁』に成果を反映させたほか、論文を投稿中にあり、査読結果を待っている状態にある。

⑤ 近代における釜山窯研究

古館の様相を明らかにするために戦前の記録や資料の収集、またその解題を行うことで、従来の研究のなかでは問題のみが指摘されてきた浅川伯教『釜山窯と對州窯』の学史における位置づけを行った。

その結果、浅川の著書は、明文化されていない彩壺会の目指した新しい陶磁史研究のディシプリンを初めて公に著したものであり、近代の朝鮮窯業の記録的な側面をもつ点で大きな意義があることが明らかとなった。

本研究成果については、浅川伯教の著書の復刊をめざし、そこに反映させる予定である。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究で得られた成果の国内外における位置づけは、史料や伝世品研究では見落とされがちであった窯業技術の側面から釜山窯の成立過程と展開について明らかにしたことが意味とインパクトと考える。

釜山窯が成立していく過程は、韓国陶磁史のなかでも陶器から白磁へとドラステックな変化が起こる時代でもある。その変化を如実にしめすのは窯業技術であるが、各時期の茶碗にはその都度の窯業技術が反映されている。最終形ともいえる釜山窯においては、日本と朝鮮の双方の技術交流が行われることになる。さらに窯業技術のみならず、一見、和様化をとげたとされる茶碗のなかにも、時代ごとの朝鮮時代の陶磁器の造形が反映されていくという意味で、釜山窯は韓国陶磁史の文脈のなかで十分に語りうる存在であると言える。

こうした成果について、国外においては研究成果の一部を特に韓国に投稿し、韓国陶磁史のなかで高麗茶碗が語りえることを提示したほか、積極的に現地の若手研究者との共同調査を行い、釜山窯の重要性を知らしめることに努めた。またアメリカ・スミソニアン財団フリア&サックラーギャラリーにも御本茶碗が少なからず所蔵されているが、新しい図録の概説上に本研究成果を反映させ、アメリカにも発信を行った。

(3) 今後の展望—釜山窯から日本へ

現在、投稿中の論文では釜山窯で育まれた窯業技術が日本へ影響を及ぼした可能性を指摘しているが、これについては今後の詳細な検討が必要である。そのほか史料において、狩野常信の下絵になる茶碗が指摘されてきたが、実際に常信との関係を思わせる作例を見出すことができたが、これについても詳細な比較が必要である。

該当者なし

さらに本研究を進めるなかで、こうした釜山窯の経営、様式（狩野派の下絵の転用）、窯業技術などは、日本の近世御用窯にも影響を及ぼしたと考えるに至った。

来年度以後は、釜山窯を大きな日本の近世陶磁のなかで位置づけることを試みることを意図し、科研申請を行った。本申請研究を遂行することではじめて両国からみた釜山窯の意義を明らかにしうるものと考えている。

今後とも査読中や発表予定の論文、そのほか概説書等にも反映させ、国内外の研究者のみならず、広く研究成果を還元していきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

① KATAYAMA MABI, Korean Tea Bowls and Tea Ceremony, *Korean Art in the Freer and Sackler Galleries*, Smithsonian Institution, 2012, 査読無, pp. 30-65.

② 片山まび・永井正浩「釜山窯跡の現況と採集片について」『木村定三コレクション 朝鮮陶磁』、愛知県美術館、査読無、2011、pp.92-95

③ 片山まび「木村定三コレクションの高麗・朝鮮陶磁」『木村定三コレクション 朝鮮陶磁』、愛知県美術館、査読無、2011、pp.86-91

④ 片山まび「입진왜란 이후 일본 주문 다완에 대한 고찰: 고기차완을 중심으로」『미술사연구』24、美術史研究会、査読有 2010、pp.87-108

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片山 まび (KATAYAMA MABI)

東京芸術大学美術学部芸術学科・准教授

研究者番号：80393312

(2) 研究分担者

該当者なし

(3) 連携研究者